

RUBeC 演習を終えて

森 陽太郎

Yotaro MORI

環境ソリューション工学専攻修士課程 2年

1. はじめに

私は2023年8月20日から9月4日の2週間に開催されたRUBeC演習に参加した。開催場所はアメリカ合衆国、カリフォルニア州の「Jodo Shinsyu Center」である。ここでは、龍谷大学の教育・研究の海外拠点として「Ryukoku University Berkeley Center (RUBeC)」が開設されている。RUBeC演習とは、上記の施設に赴き、英文法の講義や、海外の学会発表を意識した英語でのプレゼンテーション方法の習得、ホームステイや校外学習による交流を目的としたプログラムである。



図1 RUBeC参加者と教員の集合写真

2. RUBeC 演習に参加した目的

私が本演習に参加した目的は3つある。1つ目は海外での学会発表を意識した英語でのプレゼンテーション技術の習得である。2つ目は英語圏の方と日常的に触れることでのリスニング力の向上である。3つ目はホームステイによる観光では味わえないよ

うな体験をすることである。以上3点を目的にRUBeC演習に参加した。

3. 授業内容

3.1 テクニカルライティング

午前中はJodo Shinsyu Centerから近い場所に位置する語学学校Language Studied International (LSI)にて行われた。LSIで行う2週間の講義のうち、最初の1週間で行われた。午前中に文法の講義を受けた。文法の講義であったが、教員は英語しか喋らないので、非常に有意義なリスニングの学習ともなった。

3.2 英語プレゼンテーション

2週目以降のLSIでの学習は、プレゼンテーションを英語で行うための講義と対策を習った。1日目はプレゼンテーションをどのように行えば良いかを、資料を用いながら講義を受けた。具体的には、プレゼンテーションは相手の記憶に残るものではない。そのためには聴衆に目を配り、対話し、ジェスチャーを加えながら伝えることが理解しやすいプレゼンテーションを作る重要な構成となる。また、ユーモアを交えて話すことも聴衆にリラックスして聞いてもらう上で重要な要素であった。

2日目以降は日本にて作ってきたプレゼンテーション資料の修正や、発表時のイントネーション等を学んだ。また、原稿の修正もしていただき、丁寧な準備を行うことができた。



図2 プレゼンテーション練習時の様子

4. 大学・企業見学

本演習では、週に1回学外の施設に見学しに行った。1週目はカリフォルニア大学バークレー校に行った。カリフォルニア大学は世界最高水準の研究・教育機関である。キャンパスを案内してもらい、様々な施設を見学した。中には恐竜の骨格標本の展示等もあり、博物館のような一面もあった。

2週目はバークリー西岸付近にあるワイナリー「Donkey & Goat」へと行った。アメリカのワインといえばナパが有名である。しかし Donkey & Goat はバークリーにて小規模なワイナリーを営んでいた。しかし、ワインの種類は豊富であり、ワインに対する情熱をうかがえる企業であった。また、友人や教員とのコミュニケーションの場としても非常に良い機会であった。

5. ヨセミテ国立公園の見学

本演習では土日が休暇となっている。そこでは各自がアメリカで見たいこと・行いたいこと等を自由にできる。私はバークリーより300キロほど東にあるヨセミテ国立公園に行った。ここは第1号の国立公園イエローストーンより指定は遅いが、1884年に世界遺産に登録され、アメリカの国立公園野発展に貢献した。

私は幼少期より自然に興味があり、現在も生物の研究を行なっている。よって、アメリカの自然には興味があった。実際目で見て肌で感じたヨセミテ国立公園は雄大であり美しかった。ヨセミテの岩盤のほとんどは花崗岩でできており、日本人によく周知

されているブランド「THE NORTH FACE」のロゴのモチーフとなったハーフトームや、ロッククライマーの聖地となっている1000mを超える1枚岩のエル・キャピタンなどがある。これらは大きすぎて遠近感がおかしくなるほどの迫力であった。また、公園内を流れる川は非常に水が澄んでおり、目視にて魚の存在は見られなかった。川に入った際は水の冷たさに驚いた。冷たすぎて痛いと感じるほどであった。日本では見ることのできないスケールの雄大な自然を体験した貴重な経験であった。



図3 ヨセミテ国立公園の風景

6. おわりに

本演習では英語学習はもちろん、アメリカの英語社会に触れる非常に良い機会となった。英語がスラスラと喋れるようになった等の目覚ましい結果はないが、2週間で少し英語の聞き取りが容易になったように感じた。今後は日本でも英語学習に力を入れて取り組みたいと思う。また、海外に行く機会があれば自ら進んで飛び込んでいきたい。

謝辞

本演習を指導して下さった大津先生・河内先生・曽我先生・富崎先生・野口先生をはじめとする関係者に感謝申し上げます。